研究テーマ

表現力を育てる学習指導の工夫

～第4学年の国際理解の学習を通して～

沖縄市立北美小学校
教諭　　末吉　尚子

Ⅰ　テーマ設定理由

21 世紀，社会は科学技術の発展や情報化，国際化などにより大きく変化している。そのような中にあって，外国との関わりや外国の人との交流が一層進んでいく社会に主体的に対応するためには，広い視野をもち相互理解や協力の必要性を認識し，それらを実現できる人間を育成することが求められている。

第 15 期中央教育審議会答申では，国際化の進展は，人と人との相互理解・相互交流が基本となり，教育の果たす役割は，ますます重要なものであるとし，国際理解教育を進めるための留意点として，次の 3 つをあげている。

①広い視野を持ち，異文化を理解するとともに，これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。

②国際理解のためにも，日本人として，また個人としての自己の確立を図ること。

③国際社会において，相手の立場を尊重しつつ，自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から，外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること。

そのためにはまず，児童一人ひとりの個の確立が重要であり，それは，自尊感情や自己肯定感，自己表現力の育成と捉えることができる。学習指導要領においても，「豊かな人間性や社会性，国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」を基本方針として提示している。

本校では，「総合的な学習の時間」に「国際理解」が位置づけられている。これまでの取り組みをふり返ってみると，「英語活動」の時間において，大きな声で堂々と発言したり，一人で何度も発言したりする児童がいる一方で，友達や教師がヒントを出してもなかなか言うことができなかったり，退屈そうにしている児童が見受けられた。それは，伝えたい，表現したいという意欲を高めることができていなかったという反省がある。それと同時に，本校児童の課題である「表現する力」が身についていないことも原因の一つであると考えられる。自分の思いや考えをしっかりと説明できない，わかっていてもなかなか答えない，自分の考えをどう伝えてよいのかわからないといった課題であった。

そこで，外国の生活や文化，言語などに興味をもち，自ら進んで伝えよう，表現しようとする意欲をもたせるために，交流活動を取り入れたいと考えた。交流・集会活動は，児童にとっては直接的な体験ができる点から，表現力を育てることができるのではないか。また，交流活動を通して，様々な国の人々や文化について興味・関心が高まり，交流から生まれる新たな課題学習へと導いていくことができるのではないかと考えた。授業においては，グループでの話し合い活動を取り入れたり，ワークシートを活用して発表の手順を工夫したりすることで発表意欲を高めていきたい。また，児童の身近な課題を調べさせることで発表意欲につなげていきたいと考える。

以上のことから，国際理解の学習において，学習形態や学習課題の持たせ方を工夫することにより，表現意欲が高まり，自分の思いや考えを伝えることができるようになるであろうと考え，本テーマを設定した。

Ⅱ　目指す児童像

○自分の思いや考えを伝えることができる児童
○自ら進んで課題を見つけ，課題解決に取り組む児童

Ⅲ　研究目標

国際理解の学習において，交流活動や発表会活動を取り入れ，表現力を育てる学習指導の工夫

Ⅳ　研究仮説

１　基本仮説

国際理解の学習において，学習形態や学習課題の持たせ方を工夫することにより，表現意欲が高まり，自分の思いや考えを伝えることができるようになるであろう。

２　具体仮説

（１）表現力や国際理解教育に関する理論研究や児童の実態調査を行い，分析することによって，実態に応じた指導のあり方が明確になるであろう。

（２）グループでの学び合いや自分と身近な課題を調べることで表現意欲が高まり，自分の思いや考えを伝えることができるようになるであろう。

Ⅴ　研究構想図

次ページ

Ⅵ 研究内容

１ 研究内容１

（１）表現力の育成

①表現力とは

小学校学習指導要領解説総則編では，「生涯にわたる学習の基礎を培うため，論理的な思考力や判断力，表現力などの能力の育成を図ることは極めて重要である。」と述べられており，表現力の育成は極めて重要であると考える。

表現について，広辞苑では，「心的状態・過程または性的・志向・意味など総じて精神的・主体的なものを外面的・感性的形象として表すこと。また，この客観的・感性的形象そのもの，すなわち表情・身振り・動作・言語・手跡・作品など。表出。」となっている。

松本勝信（異年齢集団の意義とその生かし方1997）は，表現力とは「表現において，表現目的，表現内容，表現方法，表現の望ましさの改善，表現意欲等を，自らの意志で決定しコントロールする力」と述べている。また，「小学校学習指導要領の展開　総合的学習編」では，「表現力とは，自分の思いや願いを素直に表現し，周囲の人々に理解してもらおうとする力や態度」と定義している。

以上の論を踏まえ，表現力を「自分の意見や考え，感じたことなどを自分のよさである技能などを生かしながら的確に伝える能力」と捉える。

自分の思いや考えを表現する力を育成することは，人間の本来もっている表現の意欲や喜びを高め，児童が自己を認識し，自己を実現することにつながる。さらに，児童に自信や存在感を味わわせ，豊かな心を育成することにつながると考える。

②表現活動の意義

総合的な学習における表現活動は，言語・身体・音楽・造形等，様々な表現手段・方法を総合させた活動が考えられ，「小学校学習指導要領の展開　総合的学習編」では，教育的な意義として次の４つをあげている。

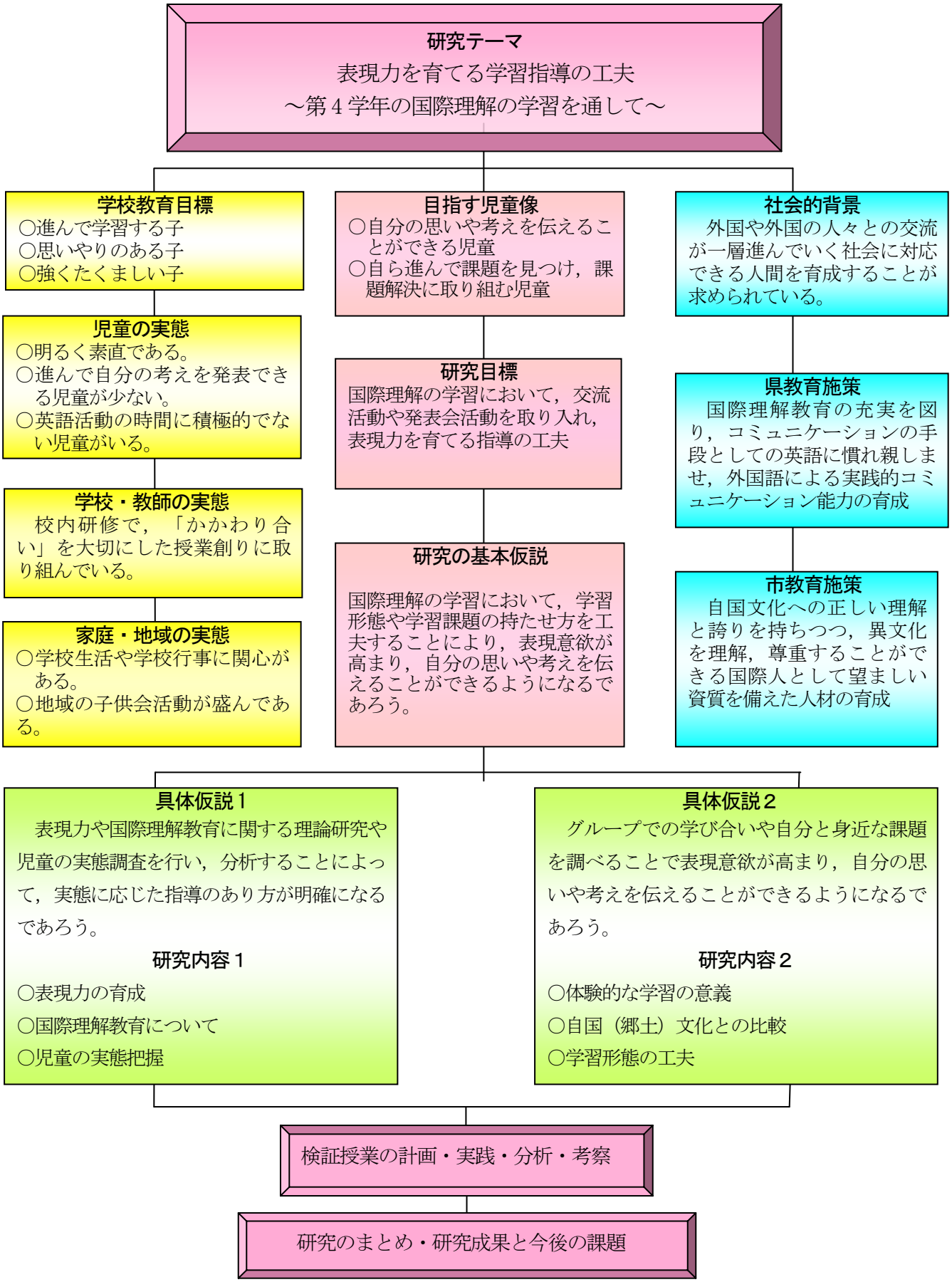
ア　体験が表現意欲を高める

五感を通しての身近な環境とのかかわりや生きた体験によって，児童の内面にある思いや願いを高めることができる。直接体験が児童の感性を高め，イメージをふくらませ，表現意欲を高める。

イ　個に応じる表現の可能性が拡がる

自分の思いや願い・イメージに応じて，多様な表現方法や手段を選択する機会に恵まれ

Ⅴ　研究構想図


研究テーマ
表現力を育てる学習指導の工夫
～第４学年の国際理解の学習を通して～
学校教育目標
○進んで学習する子
○思いやりのある子
○強くたくましい子
児童の実態
○明るく素直である。
○進んで自分の考えを発表できる児童が少ない。
○英語活動の時間に積極的でない児童がいる。
学校・教師の実態
校内研修で，「かかわり合い」を大切にした授業創りに取り組んでいる。
家庭・地域の実態
○学校生活や学校行事に関心がある。
○地域の子供会活動が盛んである。
目指す児童像
○自分の思いや考えを伝えることができる児童
○自ら進んで課題を見つけ，課題解決に取り組む児童
研究目標
国際理解の学習において，交流活動や発表会活動を取り入れ，表現力を育てる指導の工夫
研究の基本仮説
国際理解の学習において，学習形態や学習課題の持たせ方を工夫することにより，表現意欲が高まり，自分の思いや考えを伝えることができるようになるであろう。
社会的背景
外国や外国の人々との交流が一層進んでいく社会に対応できる人間を育成することが求められている。
県教育施策
国際理解教育の充実を図り，コミュニケーションの手段としての英語に慣れ親しませ，外国語による実践的コミュニケーション能力の育成
市教育施策
自国文化への正しい理解と誇りを持ちつつ，異文化を理解，尊重することができる国際人として望ましい資質を備えた人材の育成
具体仮説１
表現力や国際理解教育に関する理論研究や児童の実態調査を行い，分析することによって，実態に応じた指導のあり方が明確になるであろう。
研究内容１
○表現力の育成
○国際理解教育について
○児童の実態把握
具体仮説２
グループでの学び合いや自分と身近な課題を調べることで表現意欲が高まり，自分の思いや考えを伝えることができるようになるであろう。
研究内容２
○体験的な学習の意義
○自国（郷土）文化との比較
○学習形態の工夫
検証授業の計画・実践・分析・考察
研究のまとめ・研究成果と今後の課題

る。より児童の個性的・主体的な表現を生む可能性が拡がる。

ウ　交流・発表の場が表現を深め・拡げる

交流会や発表会は，児童が自分たちの思いや願いを交換し合い，共感し合う場である。このことは自分の表現を深め，拡げる機会となり得る。また，発表という表現活動は，他者を強く意識することができ，児童は表現意欲を触発され，必要性を感じつつ自ら表現技能を高めていく。

エ　自己実現へつながる表現力が育成される

児童の思いや願いから出発することにより児童の表現意欲や表現の喜びを高める。さらに，児童に存在感や成就感を味わわせ，自信をつけることにつながる。

③表現方法

〇まとめ方

レポート　作文　詩　手紙　紙芝居　新聞 パンフレット　絵本　巻物　　脚本　原稿 ポスター　　ガイドブック　クイズ形式

〇発表方法

劇　ニュース　討論会　発表会　人形劇 オペレッタ　ペープサート　紙芝居　クイズ ポスターセッション　OHP　ビデオ　パワーポイント

以上のような表現活動を行う場合，教師が配慮することによりさらに表現力を高めることができる。

ア　教師や受け手の意識改革を図る

児童が本来もっている表現力を伸ばし，支援するという教師や受け取る側の意識改革が重要である。

イ　学びの場を保障する

五感を通しての環境とのかかわりや体験・経験こそが表現力のもとになる。また，自己の思いや考えを発表し，交流する場を保障する。

ウ　表現方法・手段の多様性を保障する

児童のより主体的で意欲的な表現を可能にするために，表現方法・手段の多様性や選択の機会を保障する。

エ　自己評価・相互評価を重視する

ワークシートや振り返りカードなどを活用し，児童自身が自分の表現を見つめ認識し高めていこうとする自己評価を取り入れる。また，交流や発表の場で友人や受け手の相互評価を受けることも大切である。

オ　他者とのかかわりを重視する

様々な交流活動や発表会活動を通して，他者を受容する力や違いを認める力，また他者の表現のよさを感得する力や鑑賞能力も育成される。

以上のようなことを配慮して表現活動を行うことで，児童は表現意欲が高まり表現の喜びや成就感，存在感を感じることができるようになる。そして，自信を持つことができ表現力が育っていくと考える。

（2）国際理解教育について

①国際理解教育の必要性

世界経済の相互依存関係が拡大するにしたがって海外への旅行者や日本を訪れる外国人の増加など社会の国際化，また，高校生の海外留学及び海外への修学旅行など学校においても国際化が急速に進んでいる。

第 15 期中央教育審議会答申においては，我が国の国際化の状況を踏まえて国際化の進展は人と人との相互理解・相互交流が基本となり，教育の果たす役割は，重要であるとした。また，学習指導要領においては，国際化の進展に伴い国際社会の中で日本人としての自覚をもち主体的に生きていく上で必要な資質や能力の基礎を培うことも大切であるとしている。

このように子供を取り巻く社会環境の変化に対応するためにも，また，これからの国際社会で活躍するためにも学校教育において国際理解教育を推進していかなければならないと考えられる。

②国際理解教育のねらい

小学校段階における国際理解教育の重要なねらいは，「豊かな心を育成すること」であると言われている。異質なものを異質なものとして認め，偏見や差別をすることなく，相手の立場を理解し，互いに尊重し合い，相互理解に基づいた人間関係を培い，ともに協力したり強調したりすることのできる人間形成にあるといえる。

第 15 期中央教育審議会答申においても「違い」を「違い」として認識していく態度や相互に共通している点を見つけていく態度，相互の歴史的伝統・多元的な価値観を尊重し合う態度などを育成していくことが重要であるとしている。

子供たちに「身につけさせたい力」として「小学校国際理解教育の進め方」を参考に次の具体目標をたてて指導を進めることにした。

ア　自国文化理解

人々の生活用式や生き方・考え方や伝統的な行事などを学習することを通して，日本の国の文化や伝統を正しく理解し，尊重する能力や態度を育成する。

なお，自国文化と諸外国の文化の類似点や相違点にも気づかせることにより，文化理解をいっそう深めていくことができる。

イ　異国文化理解

諸外国の風俗・習慣・文化に興味や関心を持たせるとともに，多様な価値観に基づき，それらを正しく理解し，尊重する能力や態度を育成する。

ウ　自他の尊重

自分と異なるものの見方や考え方をする人々の存在に気づき，それを尊重する能力や態度を育成する。また，そのことを通して自らの見方や考え方をより豊かなものに育てていく。

エ　共生の意識の形成

国際的な社会における経済や文化などの相互依存関係，環境問題や紛争などの地球規模的な問題を理解し，国際平和・国際協調など人類の幸福と平和のために身近な社会で役立とうとする。

オ　コミュニケーション能力

自分の見方や考え方をもち，他人の意見に左右されずに明確に表現し，相手と心や気持ちを通い合わせる能力や態度を育成する。

③「総合的な学習の時間」における国際理解教育の視点

佐藤郡衛（「総合的な学習」の展開 1999）は，「総合的な学習の時間」における国際理解教育の視点について，「『人間』をベースにして，自己とのかかわり合いが強く意識できるような教材化の視点が不可欠である。そのことにより，自分の生活や生き方にかかわる学習になり，自分の日常生活を振り返ったり，自分のこれからの生き方にまで影響を与えることにもなる。自己との関わりの追求こそが『生きて働く力』に他ならない。」としている。

佐藤の指摘する視点は，総合的な学習の時間のねらいの一つである「自己の生き方を考える」ことと大きく関わっている。知識のみの理解ではなく学習内容と子供たちの生活との関連性を
見出させることが必要であると考える。そのために，常に自分との関わりを意識させながら学習活動後にその時間で学んだことや気づいたことをまとめさせるようにし，次の学習へと導いていきたい。

④各教科との関連性

平成 15 年に，「確かな学力」を育成し，「生きる力」をはぐくむという学習指導要領のねらいの一層の実現を図るという趣旨で学習指導要領の一部改正が行われた。

総合的な学習の時間においては，各教科との関連に十分な配慮がなされないまま実施されている例が見受けられたとして，「各教科，道徳及び特別活動で身につけた知識や技能などを相互に関連付け，学習や生活において生かし，それらが総合的に働くようにすること」がねらいとして明確に位置付けられた。

国際理解教育にかかわる学習内容は複雑，多様で入り組んでおり，教科をまたぎ，あるいは教科を超えてしまうことが考えられる。そこで，総合的な学習の時間において，各教科で身につけた知識や技能，ものの見方，考え方等を総動員しながら問題を解決していくことで，学習内容が充実していくと考えられる。

各教科との関連について，安彦忠彦（総合的な学習ハンドブック 2003）は次のように分類している。

①教科の基礎部分に位置づける

②教科間の横断・相関を図る

③教科の発展応用として位置づける

これらを踏まえ，本研究では主として①と②に焦点を絞った単元を設定する。例えば，算数の時間に学習した「大きな数」から交流する国の人口と日本の人口を比較させたり，社会科「水のゆくえ」では，われわれの生活の便利さと，外国の水事情の比較をさせたい。また，国語で学習したローマ字や発表方法，資料のまとめ方などを実践させたい。

⑤ 道徳・特別活動との関連性

「小学校学習指導要領の展開　総合的学習編」

では，「『生きる力』を育むことを背景として創設された総合的な学習の時間においては，道徳・特別活動との関連付けを十分に図り，自己の生き方を総合的に考える子供の姿を実現することが求められている。」とし，総合的な学習の時間，道徳の時間，特別活動の時間について次のように述べている。

「総合的な学習の時間では，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，より良く問題を解決する中で，自分とかかわらせて見つめ，自分の生き方に目を向けていく。

道徳の時間では，人間としてよりよく生きるとはどういうことか，道徳性の基盤となる価値を計画的・発展的に取り上げ，主体的な実践力を育成する取り組みがなされる。

特別活動では，集団活動を通した教育活動としての特性を生かし，子どもが自分自身の行動を自覚と責任をもって決定しながら，実践的に学んでいく過程が重視される。」

本研究においては，体験的な学習を通して自分の生き方に目をむけさせる機会とし，道徳の時間や特別活動では，関連する題材での指導を通して，実践的な態度を育てていきたい。

(3)児童の実態調査

①表現力や国際理解に関する意識調査

ア　調査目的

児童の表現力や外国に対する意識や課題を調査し，単元の指導に生かすための資料とする。

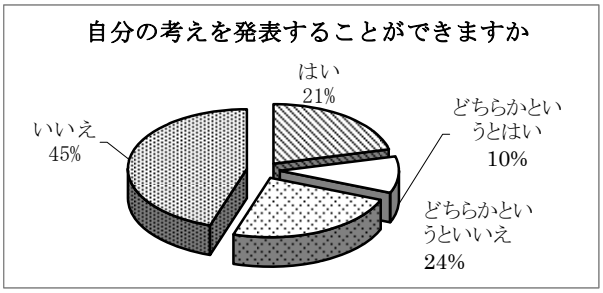
イ　調査方法

〇質問紙法

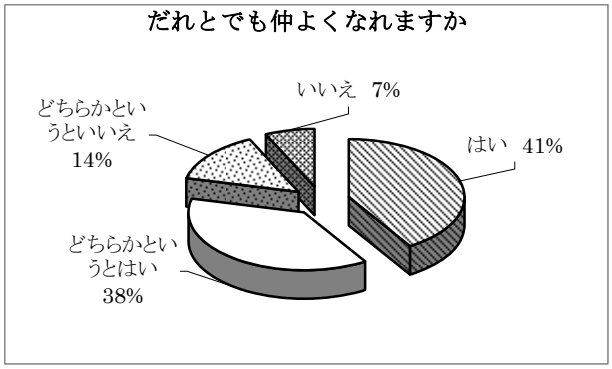
〇質問対象　北美小学校４年２組　29 名

〇調査日　平成 19 年５月 11 日（金）

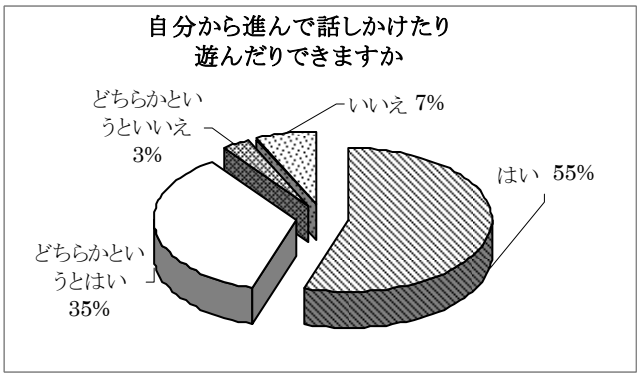
ウ　アンケート調査の結果と考察



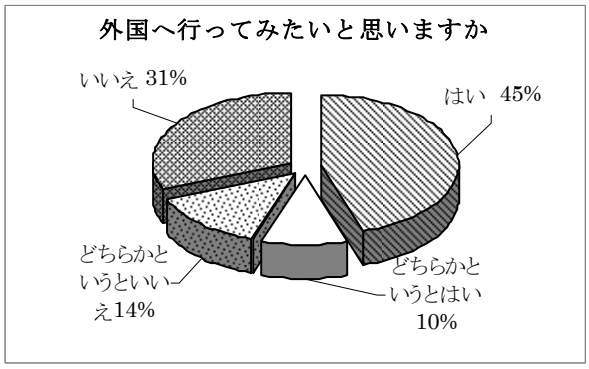
「自分の考えを発表することができますか」という問いに対して「はい」「どちらかというとはい」と答えた児童は９人（31％）である。「どちらかというといいえ」「いいえ」と答えた児童は 20 人（69％）であった。自分の考えを発表することに対して苦手意識をもっている集団であるということがいえる。理由としては，「恥ずかしい」「緊張して忘れることがある」「間違っていたら恥ずかしい」などがあった。発表が苦手な児童に自信をつけさせてあげる声かけやワークシートによる自己評価での振り返り，自分の考えを話す場を意図的に作ること等が大事であると考える。また，間違ってもいいんだというクラスの雰囲気作りも大事であると思われる。



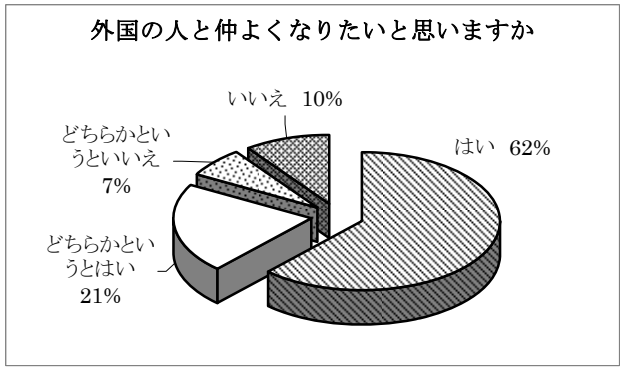
「だれとでも仲よくなれますか」という問いに対して「はい」「どちらかというとはいうとはい」と答えた児童が 23 人（79%）であった。「どちらかというといいえ」「いいえ」と答えた児童は 6 人（21%）であった。その理由としては「いつも同じ人と遊んでしまう」「恥ずかしいから」「友達になろうと言えない」などがあった。クラスのみんなとかかわらせるような学習形態の工夫や友達の輪を広げていけるような取り組みが必要であると考える。



「自分から進んで話しかけたり遊んだりできますか」という問いに対して「はい」「どちらかというとはい」と答えた児童は 26 人（90%）である。「どちらかというといいえ」「いいえ」と答えた児童は，3 人（10%）でその理由は，「声をかけられない」「ケンカしてしまいそう」などの理由があった。また，3 人のうち 2 人は自分の考えを発表することが苦手と答えている。そういった児童には，自尊感情や自己表現力を高める指導を継続して行う必要があると思われる。

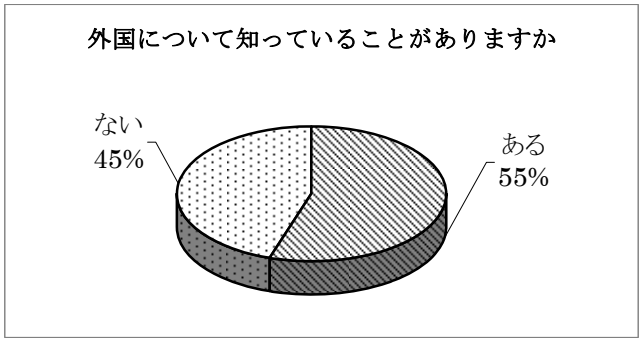


「外国へ行ってみたいと思いますか」という問いに対して「はい」「どちらかというとはい」と答えた児童は 16 人（55%）である。その理由は「いろいろなことが知りたい」「どんな物があるか見たい」など，外国に対して興味を持っていることがわかる。「どちらかというといいえ」「いいえ」と答えた児童は 13 人（45%）で，その理由は「言葉が通じないから」「英語はあいさつしかわからないから」「英語がしゃべれないから」等言葉に対する不安が大きいことがわかる。

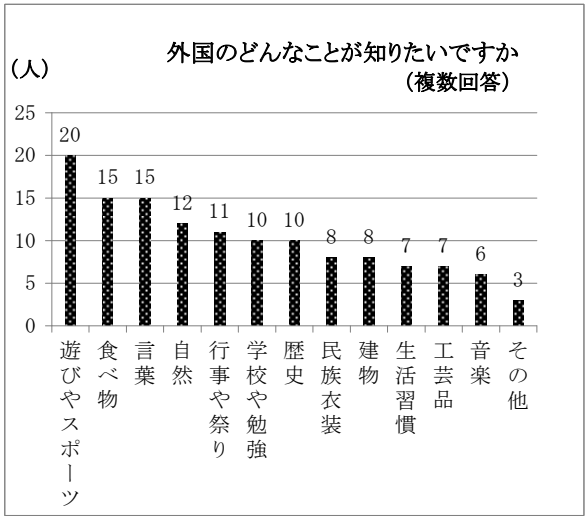


「外国の人と仲よくなりたいと思いますか」という問いに対して「はい」「どちらかというとはい」と答えた児童は 24 人（83%）である。「外国へ行ってみたいと思いますか」という問いに「いいえ」と答えていた児童のなかにも「友達になりたい」「仲よくなって一緒に遊びたい」「歴史を教えてほしい」等と理由を述べていることから，友好的な関係を築きたいと考えていることが分かる。「どちらかというといいえ」「いいえ」と答えた児童は５人（17%）で，その理由は「英語がわからないから」「言

葉が全然通じないから」「言っていることがわからないから」等やはり言葉に対する不安が大きいことが分かる。言葉が通じなくても様々な方法でコミュニケーションを図ることができることに気づかせるようにしたい。



「外国について知っていることがありますか」という問いに対して「ある」と答えた児童は55%，「ない」と答えた児童は 45%であった。国としては，アメリカや韓国，中国と答えた児童が多かった。そのほかには，イタリアやトルコ，カナダなどであった。知っている事柄としては，「自由の女神がある」「キムチがおいしい」「人口が世界一」「パンダがいる」等で，単に「知っている」という段階にとどまっている児童が多い。自分とのかかわりで実感をもって「わかる」という段階にまでは達していない。また，アフリカ圏や南アメリカ圏などの国を答えた児童がいないことから，世界にはいろんな国があることを知らせ，学習を展開していく必要性を感じる。



「外国のどんなことが知りたいですか」という問いに対しての上位は，「遊びやスポーツ」「食べ物」「言葉」「自然」「行事や祭り」などである。「遊びやスポーツ」「食べ物」行事や祭り」は自分とかかわりが深いものであり，それが知りたいことにつながっていると思われる。「言葉」については，コミュニケーションの手段として重要と考えている児童が多いことが理由の一つではないかと思われる。

２　研究内容２

(1)体験的な学習の意義

①国際交流の有用性

国際交流は，イベントではなく，特に人と人との交流においては，人々の生活や生き方を人間同士として相互交流を深めたり，さらに世界へ目を向けさせ，地球規模の課題解決への関心を高める契機となったりするものであると考えられている。多田孝志（学校における国際理解教育 1997）は国際交流の有用性について次のように述べている。

ア　外国の人々と直接交流することにより，外国人への抵抗感がなくなり，また，親しんでいこうとする心情や態度が培われていく。

イ　世界各地の国々や異文化に対する興味・関心が高まり，また視野が広がっていく。

ウ　肌の色や言葉が異なっていても，同じ人間同士であることが分かり，そのことから人種偏見や差別の不当性を意識していける。

エ　自己表現力や生きた役に立つ外国語の習得の大切さなどのコミュニケーション能力の必要性が実感できる。

オ　生活習慣，社会のルール，人々の願い，悲しみ，喜びなど生活感覚での異文化理解や人間理解が深められる。

カ　外国の人々との交流を通して，自分自身を客観的に見たり，日本を相対化して見たり，世界の中の日本人を自覚したり，多様な角度から見方を広げたり思考を深めることができる。

②交流会のもち方の工夫

佐藤郡衛（国際理解教育の授業づくり 1999）は「総合的な学習の時間」における国際理解教育の視点として「『共に生きる』ことを実現するには，身近な生活のレベルで異なった文化をもつ人々と交流していくことが重要になる。

違いを認め合い，共生していくには，相互に理解を深めていかなければならない。しかも，単なる知識理解ではなく，それに共感的理解が伴わなければならない。そのためには，体験学習や交流学習が不可欠である。

ただ，共感的理解も，科学的な認識力を前提にしなければ，温情主義や情緒主義に陥ってしまう。そうならないためにも，授業の中で事実の学習や科学的な認識力・思考力を培っていくことが必要である。これからの教育は，正しい知識と科学的な認識力に基づいた『理性』と他者への共感的理解という『感性』の両者の統合が求められる。」と述べている。

そこで，交流活動では，事前・事後学習を重視し，事前に交流する国について調べ学習を行い，事後学習では成果を定着させたり，発展させたりするように指導の工夫を図りたい。事前学習・体験学習・事後学習と学びが連続することが大事であると考える。

(2)自国（郷土）文化との比較

生活・生業文化に着目した実践の有用性

異文化をもつ人々の民族性や生き方を理解しようとするには，市井の人々の生活・生業文化を理解していくことが有効であると言われている。生活・生業文化の内容である衣食住文化や言語などは，子どもたちの身近な生活にかかわっているだけに納得し関心をもち『実感』をもって文化の多様性や等価値性，普遍性を感得していける教材である。

多田孝志は，G.P.スケーブンドや，E.B.タイラーによって示された項目を参考にし，生活・生業文化の内容を分類している。

文化	内容
食文化	世界には，様々な食文化がある。手食の食習慣も世界各地にある。また，食事のマナーは民族によって異なる。各民族には固有の文化があり，異文化をもつ人々との会食の際には，異なる食習慣を尊重しなければならないことを心得ておくべきである。
衣文化	世界の国々の衣服は，それぞれの地域の気温・気候に適応して発達してきた。色，着方などにも地域ならではの工夫と特色がある。また衣服には古来から社会的地位の象徴としての役割もあり，それぞれの社会制度ともかかわってきた。このような衣文化に着目した実践は，子どもが興味をもち，楽しみながら文化の多様性や普遍性に理解を深めていくことができる。
住文化	住居もまた，気候・風土と密接に関連してきた。世界各地の特色ある住宅は，環境への適応をめざして発展してきたものである。各地の住宅様式の特色や共通性についての認識を深め，人々のよりよい住環境を求めた工夫や創意に気づかせたい。
言語	ことばは，もとになっている生活，文化とによって独特な意味をもつ。同じ言葉でも，民族を取り巻く環境や歴史によって意味するところが異なってくる。人々が日常使う言葉にも地域によって意味合いや使い方に差異がある。言語を通じての，異文化をもつ人々の交流には，文化的背景にも配慮が必要である。

家族・社会制度	世界の諸民族もそれぞれの特有の家族制度や地域社会の中で生活している。家族・社会制度は人々の生活と深くかかわっており，人々の生活の輪郭を規制するといってもよい。近代化にともない特性は薄れてきてはいるが人々の行動・思考の原点に伝統的な地域の家族・社会制度がある。
民族性	世界の人々は多様な民族性を有している。こうした人々との対応には人々の行動・思考の基礎にある民族の特性を知っておくことが大切である。
民話・昔話・童歌・遊び・祭りなど	どの地域にも民話・昔話・童歌・祭りなどが継承されている。これらには，人々の願いや夢，感動や驚きが溢れている。民話・昔話・童歌・祭りを知ることにより，人々の内面，心の襞や琴線に触れていくことができよう。民話・昔話・童歌・祭り等は文化を理解する貴重な題材である。

本研究では，それぞれのグループで一つの文化に視点をあてて自国文化（郷土）との比較をさせてみたい。食文化，生活習慣，言語，祭りなど，子どもたちの興味・関心のある学習課題を調べ，追求していく。そして追求していく過程において，「比較する」ことをポイントにおく。「比較する」ことにより，互いの国の相違点・共通点を見出させるようにしたい。自分たちの身近なものと比較することによって，それぞれのよさや違いに気づき，わかり合い，互いを認め尊重し合う心情を育てることにつなげていきたいと考える。

また，調べ学習は，発表会によって，相互の表現コミュニケーション能力の育成につながる。自ら調べた内容をまとめて相手に伝わるように発表することは，自分の思いや考えを相手に伝える力になると考える。

(3)学習形態の工夫

①学習方法の工夫

主体的な学習を積み重ねていくと，学習の仕方が身につき，そのことによって国際理解教育がめざす能力や資質を育成することができる。学習内容のみでなく，学習の仕方によっても資質・能力を高めることができると考える。

ア　事象・問題発見型

子どもたちの身近な生活の中から「気づき」「発見」を促し，実践・行動につなげていこうとする授業方法

イ　問題解決型

課題や発見した問題を解決するために，自分や自分の所属する集団で，「何を，どう考え，どういう方法で，どのようにすればよいのか」を判断し，解決していく授業方法

ウ　調査研究型

自分の生活や学習の中から，興味・関心をもった課題を取り上げ，自分のやり方・考え方で調査研究することにより問題の原因や他とのつながり，あるいは，自分の生活との関係などを追及して，自分の考えを明らかにしたりする授業方法

エ 体験学習型

体験は，子どもの感性を磨き個性を育てる源である。あるねらいをもって体験を取り入れる授業方法

オ　発表・表現型

学習したことを基に自分の考え方・感じ方や思いを，相手にわかりやすく発表，表現することをねらう学習方法。

表現方法は，話し言葉，絵やポスターや音楽，作文や新聞やビデオ，身体表現などその授業に応じてさまざまである。

カ　話し合い・討論型

あらゆる教育活動の場面で，自分たちの考えを深めるための話し合い活動や問題解決のための討論活動が必要であり，そのことによって，学習をまとめたり，発展させたりする

ことをねらった授業方法。

この授業方法は，社会性の育成と同時に，自己表現力の育成とも大いにかかわっている。

本研究では，林（国際理解教育の授業づくり1999）の理論をうけ，調査研究型と体験学習型，発表・表現型，話し合い・討論型を取り入れ，他とのかかわりや共同化，自己表現力などの育成を図っていきたい。

②グループ活動の意義

総合的な学習は互いに学びあう時間である。「総合的な学習の時間」にグループ活動を取り入れる意義（尾高正浩「総合的な学習の時間・体験活動」研修 2005）をふまえ，本単元では，グループを中心に学習を進めていく。学級の実態から，グループの編成を児童に任せず，教師が児童の特性や男女比率などを考え，リーダーを中心として交流活動や調べ学習を進めることができるように意図的な編成を行うこととした。

ア　発展性のある学習のために

お互いの作業や討論により刺激を受けて，参加者が自ら「やってみたい」と思うものを見つけ出す機会を与える。

イ　自信をつけるために

話し合うことにより自分の意見が検証される。この過程を得ることで，より自分の考えが明瞭になり自信をもって発言できるようになる。

ウ　セルフ・エスティムを育てるために

自らを肯定的にとらえることのできる人は，他者に対しても肯定的な視点でとらえられる。

エ　コミュニケーション能力を身につけるために

自分の気持ちを表現できるようになることが他者の気持ちを思いやるための手掛かりを与え公正や正義についての理解を深める基盤となる。

オ　参加の楽しさを味わうために

自分が役に立っている必要とされているという感覚は楽しいものである。認められたり認めたりといったキャッチボールの中で成し遂げられた充実感は，グループワークならではの喜びである。

カ　自分自身の経験の意味を学ぶために

誰もが，他の人と分け合うことのできる，価値あるもの（経験）を豊富に持っている。この事実を知ることは物事を肯定的に考える大切な要素である。自分の思いつきや経験を共有することで，その価値を見出し深い洞察ができる。

Ⅶ　指導の実際

１ 活動の概要

(1)表現意欲を持たせる（特別活動　 構成的グループエンカウンターを取り入れて）

学級の実態から，子どもが，恥ずかしい，笑われる，先生に叱られるなどと感じることなく，自分の考えに自信をもって発言できる自由な雰囲気づくり（子ども相互の人間関係づくり，教師と子どもの人間関係づくり）をしたいと考えた。そこで，子どもたちに自尊感情や自己肯定感を育て，他者理解を促進するために特別活動の時間に構成的グループエンカウンターの手法を取り入れ合計４回の授業を行った。

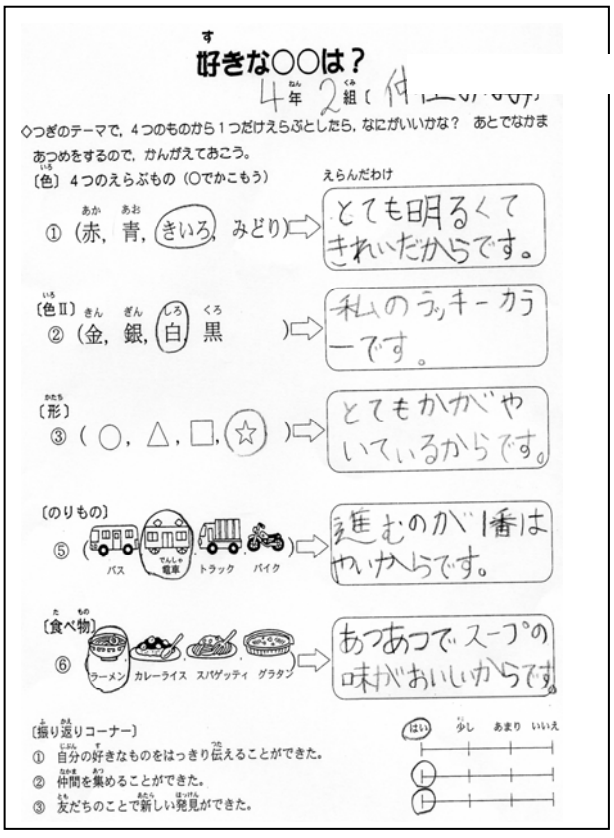
①題材名「 好きな○○は？」

②ねらい　いくつかの中から選ぶとしたら自分は何にするかを決め，仲間として集まることができている。（自分と似た好み・違う好み）

③活動の様子

「好きな○○？」各テーマで，4 つの中から自分の好きなものを選びそのわけをシートに記入する。教師の合図で，４つのコーナーに分かれて仲間集めをし，選んだわけをお互いに伝える。

選んだわけを短くてもいいので必ず書くようにさせた。集まったグループで円を作り，お互いの顔を見ながら一人ひとり選んだわけを発表させた。最初は恥ずかしがって男女問わずほとんどの児童が小さな声で発表していた。そこで，「自分と同じ理由かな？違うのかな？どんな理由か知りたいね。」と声かけをしたことで，少しずつ声も大きくなってきた。テーマによっては，大人数のグループができることもあった。その時は，みんなに聞こえるように自主的に立ち上がって発表するなど，自分の思いを伝えようとする姿が見られた。


好きな○○は？

4年 2組（ 付

◇つぎのテーマで，4つのものから1つだけえらぶとしたら，なにがいいかな？ あとでなかまあつめをするので，かんがえておこう。

〔色〕4つのえらぶもの（○でかこもう）　えらんだわけ

① （赤，青，きいろ，みどり）⇨ とても明るくてきれいだからです。

〔色Ⅱ〕② （金，銀，白，黒）⇨ 私のラッキーカラーです。

〔形〕③ （○，△，□，☆）⇨ とてもかがやいているからです。

〔のりもの〕⑤ （バス，電車，トラック，バイク）⇨ 速むのが1番はやいからです。

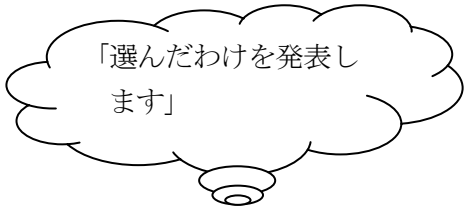
〔食べ物〕⑥ （ラーメン，カレーライス，スパゲッティ，グラタン）⇨ あつあつでスープの味がおいしいからです。

〔振り返りコーナー〕　はい　少し　あまり　いいえ

① 自分の好きなものをはっきり伝えることができた。

② 仲間を集めることができた。

③ 友だちのことで新しい発見ができた。



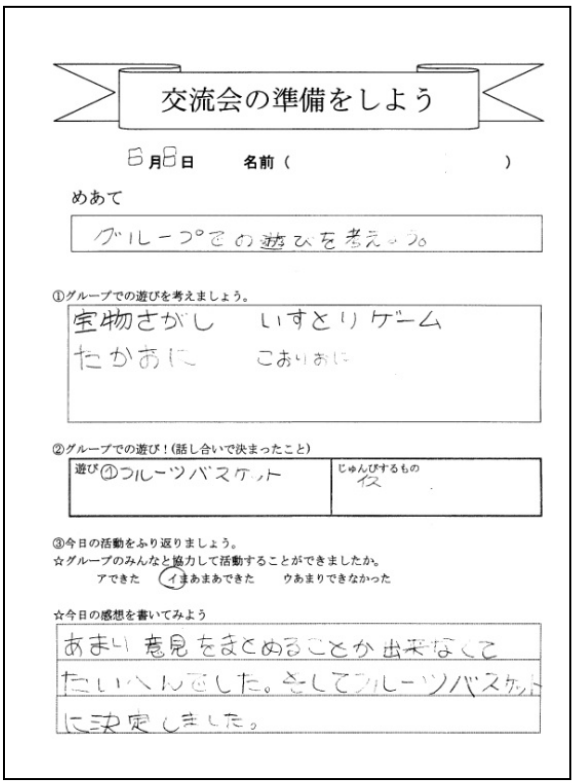
写真

写真

（2）表現手段の工夫（ワークシートの活用）

本学級の児童は，自分の考えや意見を持つことはできるが，自分の考えや意見を話す場面でつまずく児童が見られる。そこで，JICA 研修員の皆さんとの交流会へむけての計画・準備の中で，自分の思いや考えを自由に述べさせ，活動の中に生かされる楽しさを味わわせたいと考えた。

交流会で JICA 研修員の皆さんと一緒にやる「遊び」を考える学習では，一人ひとりが自分の考えを出せるように，まず最初にワークシートに自分の考えを書かせて，その後グループで話し合わせることにした。自分が考えた「遊び」を書かせてそれをもとに話し合いに参加させたことで，全員自分の考えを述べることができた。


交流会の準備をしよう

6月8日　名前（　　）

めあて

グループでの遊びを考えよう。

①グループでの遊びを考えましょう。

宝物さがし　いすとりゲーム
たかおに　こおりおに

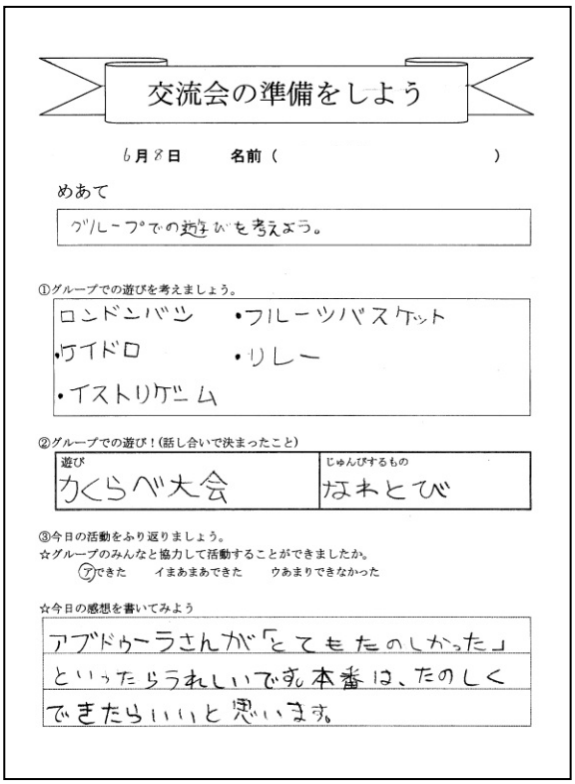
②グループでの遊び！（話し合いで決まったこと）

遊び	じゅんびするもの
①フルーツバスケット	夜

③今日の活動をふり返りましょう。
☆グループのみんなと協力して活動することができましたか。
アできた　イまあまあできた　ウあまりできなかった

☆今日の感想を書いてみよう

あまり意見をまとめることが出来なくて
たいへんでした。そしてフルーツバスケット
に決定しました。


交流会の準備をしよう

6月8日　名前（　　）

めあて

グループでの遊びを考えよう。

①グループでの遊びを考えましょう。

- ロンドンバシ
- フルーツバスケット
- ケイドロ
- リレー
- イストリゲーム

②グループでの遊び！（話し合いで決まったこと）

遊び	じゅんびするもの
かくらべ大会	なわとび

③今日の活動をふり返りましょう。
☆グループのみんなと協力して活動することができましたか。
アできた　イまあまあできた　ウあまりできなかった

☆今日の感想を書いてみよう

アブドゥーラさんが「とてもたのしかった」
といったらうれしいです。本番は、たのしく
できたらいいと思います。

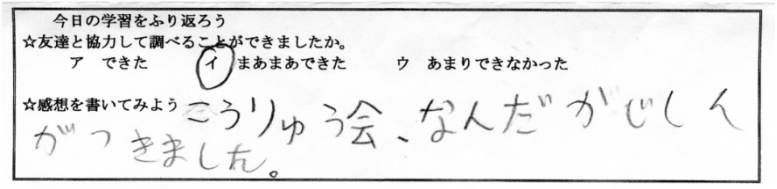
（3）交流させる（場の設定の工夫）

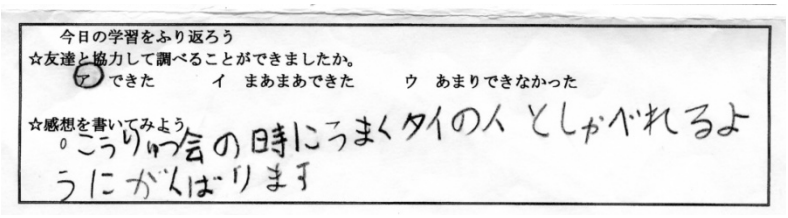
児童が進んで発表する場を設定したいと考えた。「遊び」は児童にとって一番身近なものである。それだけになかなか話し合いがまとまらず，時間ぎりぎりまで「遊び」が決まらないグループ，早々と決まったグループさまざまであった。みんなが参加できる「遊び」であるかなどを吟味しながらグループのリーダーを中心に話し合いを進めさせた。

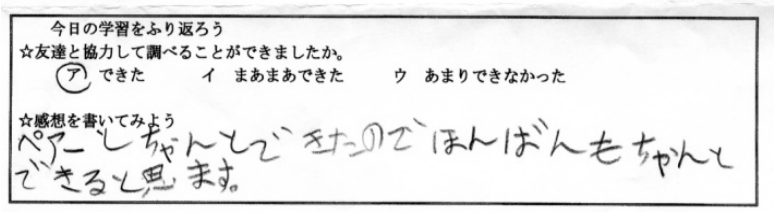
グループでの「遊び」が決まったら，自分たちでその遊びをさせてみた。「言葉が通じないから」「英語が話せないから」と言葉に対する不安をもっている児童が多いことから，実際に自分たちでやってみて，JICA 研修員の皆さんにどういうふうに説明すればよいかをグループ全員で考えさせた。困った時には先生がどうにかしてくれるという意識ではなく，自分たちで解決していかなければという意識を持たせるようにした。

（4）表現意欲を持たせる（事前の調べ学習）

JICA 研修員の皆さんと交流会を実施する前に，グループに分かれて，交流する国の国旗，位置，人口，気候，あいさつなどについて調べ学習を行った。交流会では自己紹介をした後に，交流する研修員の国の言葉で，「こんにちは」とあいさつをしようということで，さっそく練習に取り組んだ。「マイネームイズ○○，ニーハオ！」「マイネームイズ○○，サワディーカ！」まずは，グループの友達同士でやってみた。最初は，言いにくそうにしていたり，照れて恥ずかしがっていたりしていた児童も何度かやっているうちにだんだん楽しそうに練習するようになっていった。グループ内で相手を代えてやってみたり，グループ全員で練習をしたり，教師とやってみたりすることで最後には自信がつき大きな声で言えるようになっていた。







写真

ペアとのあいさつ

写真

先生とのあいさつ

（5）表現内容を持たせる（学習課題の選択）

「楽しかった」で終わってしまわないようにするために交流の中から生まれる興味や疑問を学習課題として調べ学習を行った。それぞれのグループで一つの文化に視点をあてて自国文化（郷土）との比較をさせる学習をさせた。自分たちの身近なものと比較することにより，互いのよさや違いに気づき，分かり合い，互いを尊重し合う心情育てることができるのではないかと考えた。そして，発表会で，外国の文化と自国文化（郷土）の相違点や類似点に視点をあて，伝えたい事柄を明確にして聞き手に伝えることで，表現力を育てることができるのではないかと考えた。

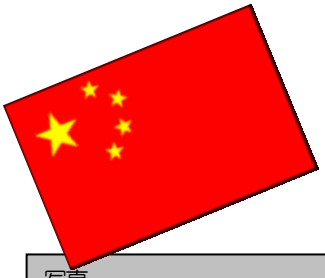
交流会のことを思い出しながら，また，図書資料やこれまでの調べ学習から，何を取り上げるかグループで相談させた。その結果，次のようなことを学習課題として調べ学習を進めることになった。

○中国グループ（中国語）

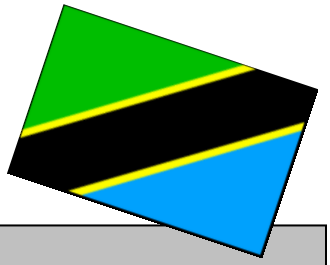
○タンザニアグループ（タンザニアと沖縄の生き物たち）

○バングラデシュグループ（サリーと着物）

○タイグループ（タイと沖縄のフルーツ）



活 動 の 様 子



写真

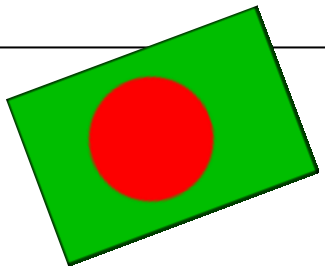
交流会でシーさんに，中国語を教えてもらいました。シーさんが着ているシャツには見たことがない漢字がたくさんありました。

写真

タンザニアには日本の富士山みたいな山があります。見たことがない動物もたくさんいます。

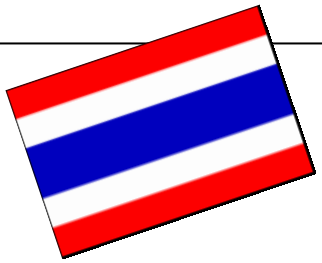
写真

JICA から借りてきたいろんな国の民族衣装を着てみました。サリーの着心地はすずしいと思いました。



写真

交流会で，タイのデュークさんとフルーツバスケットをしました。ゲームで使った果物の名前をタイ語で書いてくれました。



総合的な学習の時間活動案

平成 19 年 6 月 29 日（金）
北美小学校　　4 年 2 組
男子 15 名　女子 14 名　計 29 名
授 業 者　　末 吉 尚 子

1　単元名　　知りたいな世界

2　単元の目標
（1）　郷土や世界の国々の文化に親しみ，そのよさに気づくことができる。
（2）　世界の様々な人々と交流し，親しみをもつことができる。
（3）　進んで課題を見つけ，調べ方，まとめ方を工夫し，自分の考えを表現することができる。

3　単元について
（1）教材観
外国との関わりや外国の人との交流が一層進んでいく社会に主体的に対応するためには，広い視野をもち相互理解や協力の必要性を認識し，それらを実現できる人間を育成することが求められている。国際理解教育は，教科，道徳，特別活動などにおいてもおこなわれるものであるが，とりわけ，総合的な学習の時間においては，体験的な学習や課題学習を取り入れることによって実践的な態度や資質，能力を育てていくことができる。
本単元の学習を通して，世界には多くの国と生活があり，様々な人がいることに気づかせることができると考える。また，外国の生活や文化を調べ，理解，尊重する中で，自国（郷土）の生活習慣や文化などのよさを認識することができると考える。

（2）児童観
本学年の児童はこれまでに，「英語活動」の時間に ALT と一緒に英語であいさつやゲームをしたり，ALT の国の行事について学んだりしている。また，前学年の「国際理解教育」の授業で調べ学習をし，世界にはたくさんの国があることを知っている。しかし，異文化に対する理解や，郷土の歴史や伝統文化などについての理解は十分ではない。
アンケート調査の結果から外国への意識を見てみると，外国の人と仲よくなりたいと思ってはいるが「英語がわからないから」「言葉が全然通じないから」「言っていることがわからないから」等言葉に対する不安をもっている児童も多い。学級は，素直で全体的におとなしく，物静かな子が多いように見受けられる。自分の考えを発表することに対して苦手意識をもっている児童が多い。積極的に発表する子は決まっておりそのほとんどが男子である。そのため，発言を促し，指名することで発表する機会を与えることがよくある。

（3）指導観
本単元では，総合的な学習の時間において国際交流活動のもち方を工夫することで，国際理解を深めていきたい。交流学習では，事前の「調べ学習」に重点を置き，交流する国の知識を持たせたうえで交流させることで，交流する国の人々や文化に親しみ，そのよさに気づかせたい。交流活動を通して，単なる知識理解だけではなく，実際に異文化を体験することで「共に生きていく」実践的な態度を育てたい。また，児童の興味・関心に配慮しながら身近な日常の生活の中の文化的事象を取り上げ，外国の文化と自国文化（郷土）

との比較を通して，郷土の文化や歴史などの特色に気づかせ，互いの違いを認め，尊重する心情を育てていきたい。

4　教科，道徳，特別活動との関連

教科，領域	関連する単元・題材
国語	・「伝えたいことをはっきりさせよう」・「ローマ字」 ・「伝言はまちがえずに」・「手とこころで読む」
算数	・「大きな数」・「資料の整理」
社会	・「健康なくらしとまちづくり」・「わたしたちの県のまちづくり」
音楽	・「日本の音楽に親しもう」
道徳	・「カンボジアからきた転校生」・「ふるさとふれあい広場」 ・「ガイジンとよばないで」
特別活動	・「4年生になって」・「春の遠足の計画」

5　指導計画（全２５時間）

時数	学習内容	評価基準	内容・方法・支援	評価資料	関連教科
1	1　アンケート				
1	2 オリエンテーション 単元 『知りたいな世界』	・学習の進め方がわかる。	・４年生のテーマについて説明する。 ・国際交流活動をすることを知る。	観察 ワークシート	
1	3 学習計画を立てよう ・グループ編成 （国別） ・学習課題，交流学習計画	・課題をもとに，見通しをもって活動計画を立てることができる。	・調べる方法について考えさせる。 図書資料，インターネット	観察 ワークシート	
5	4 交流会の準備をしよう （1）郷土の調べ学習（自文化理解）	・自分たちの住む沖縄について興味・関心を持って調べることができる。	・自分たちの住む沖縄について興味・関心をもち，郷土のよさに気づかせる。	ワークシート	社会 国語
3	（2）国別調べ学習 （異文化理解）	・相手の国のことを知り，日本や沖縄との違いや同じところがわかる。	・国旗，位置，人口，気候，あいさつなどを知り，日本との違いや同じところに気づかせる。	ワークシート	社会 国語

3	（3）交流会の準備	・自分たちの計画の中から役割を分担して，準備を行うことができる。	・プログラムや装飾，交流の内容などを考えて準備をさせる。	観察 ワークシート	図工 音楽
2	5 交流会をしよう （1）歓迎セレモニー （2）グループ交流 （3）感謝セレモニー	・自ら進んでかかわろうとしたり，交流会を楽しもうとしたりする。	・児童が積極的に交流が行えるように各グループを回り，声をかける。 ・必要に応じて輪の中に入り，児童が行動を起こすきっかけとなるような言葉をかける。	観察	
1	6 これまでの活動を振り返ろう （1）交流の感想	・交流会までの取り組みや交流会を振り返り感想を書くことができる。	・交流をしての感想を書かせる。	ワークシート	国語
1	（2）お礼の手紙	・交流会を通して気づいたことや感じたことを手紙に書くことができる。	・感謝の気持ちを込めて手紙を書かせる。	ワークシート	国語
5	（3）交流したり調べたりして分かったことをまとめよう	・交流会までの取り組みや交流会で学んだことを生かしながらまとめることができる。	・多様な方法でまとめる。 文章，絵，図 ・これまでに調べたことや交流会で新しく分かったことをまとめさせる。	観察 ワークシート	国語 図工
1 **検証授業**	7 発表会をしよう （1）グループで発表する （2）発表を聞き感想を述べる （3）まとめ	・調べたことを相手に分かりやすく発表することができる。 ・友達の発表や考えからさらに自分の考えを深めることができる。	・交流活動で学んだことや調べ学習で分かったことを発表させる。 ・外国の文化と，郷土の文化の比較から，相違点や類似点に気づかせる。 ・これまでの学習を振り返り，自分の感想を発表したり，友達の発表を聞いたりすることで，異文化理解につなげる。	発表資料 観察 ワークシート 発表	国語 道徳
1	8アンケート				

６　本時の学習

（１）本時の目標

・調べたことを，グループの役割分担に従って分かりやすく発表することができる。

・発表会を通して，外国の文化と郷土の文化についての理解を深めることができる。

（２）授業仮説

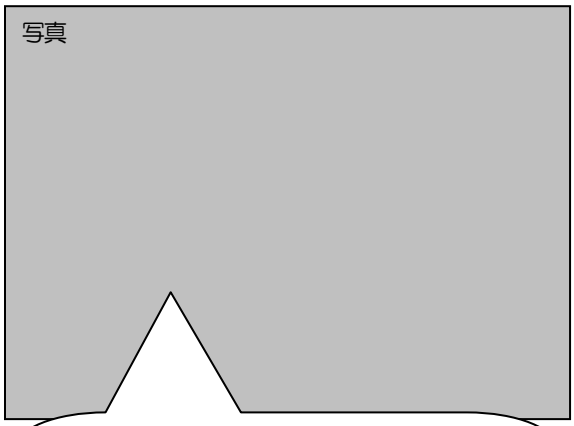
・発表会において，グループで調べてまとめた作品をお互いに発表し合うことで，他のグループの多様な表現に気づき，表現力を高めていけるであろう。

（３）本時の展開（24／25）

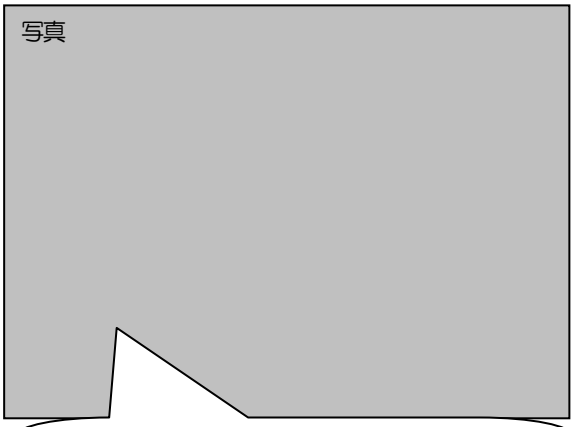
過程	学習活動	指導上の留意点	評価 ☆評価方法
導入	１ 本時のめあてを確認する。 『知りたいな世界！発表会』 【発表】調べたことを分かりやすく発表しよう 【聞く】・外国と日本（沖縄）の違うところや似ているところを見つけよう	・自信をもって発表できるように意欲づけをする。 ・話の聞き方・発表の仕方に気をつけさせる。	
展開	２ グループごとに発表をする。 ①中国グループ（中国語） ②タンザニアグループ （タンザニアと沖縄の生き物たち） ③バングラデシュグループ （サリーと着物） ④タイグループ （タイと沖縄のフルーツ） ３ 発見した，外国の文化と郷土の文化の相違点や類似点を発表する。	・外国の文化と，郷土の文化の相違点や類似点についてメモをとりながら発表を聞かせる。 ・聞く視点を示し，集中して聴かせるようにする。 ・気づいたことを自由に発表させる。	・調べたことを相手に分かりやすく発表することができる。 ☆発表資料 ☆観察

ま と め	4 友達の発表や教師の話を聞いて，気づいたことや思ったことなどをワークシートに記入し，発表する。 5 まとめをする。 ・本時の自己評価をする。	・それぞれの国の生活のよさや楽しさに触れた発言があれば，それを取り上げ話し合いを深める。 ・他のグループの発表のよい点についても考えさせる。 ・国際理解に関する絵本を紹介し，世界の様々な国に関心を持たせるようにする。 ・ワークシートがなかなか書けない児童は，友達の発表を参考にさせる。	・友達の発表や考えからさらに自分の考えを深めることができる。 ☆ワークシート ☆発表 ☆ワークシート

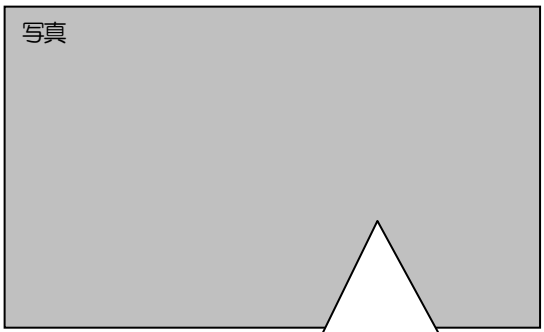
（4）検証授業の発表会の様子



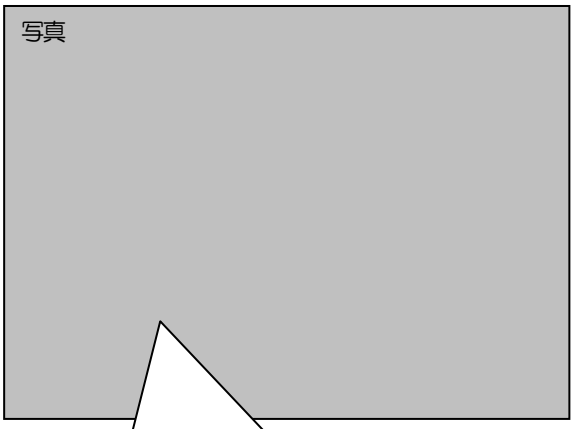
私は，タイの食べ物に興味を持ちました。お母さんといっしょにタイのデザートを作りました。これは 2 回目に作ったものでおいしかったです。



沖縄の生き物とタンザニアの生き物を比べてみました。



中国語のクイズを出します。



調べていくうちに，サリーと沖縄の織物である読谷山花織とは模様が似ていることがわかりました。

7　公開検証授業の授業分析

（1）研究協議会から

・沖縄や日本の文化と比べさせたことはよかった。

・JICA から借りてきた衣装を着てみたことも動機づけにつながっていたように思う。

・メモをとりながら聞いていたが，メモを取ることに精一杯になっていたので，メモは取らずに発表をじっくり聞かせたほうがよかった。

・それぞれのグループが作成した新聞を黒板に張っていたが，それの活用の仕方を工夫すると良かった。

・共有化が必要なので，最後は，分かったことを発表するとよかった。

・総合的な学習での感想の述べ方として，どんなことがわかったのかもう少し詳しく発表できるとよかった。

・授業のまとめはめあてに戻らないといけない。次の期待につなげるような授業の終わり方にするとよい

・支援をするとどうなるか，児童の実態を捉えることが授業仮説や授業の手立てにつながる。

・絵本を紹介するときに，今回調べていない他の国へ関心をむけるような言葉があるとよかった。

・調べることがもっといっぱい出てくるような声かけ，次の思考を促すようなひっぱり方，沖縄とのかかわりを問うようなつっこみが必要である。

（2）考察

本時の目標は，「調べたことをグループの役割分担に従って分かりやすく発表することができる。」「発表会を通して，外国の文化と郷土の文化についての理解を深めることができる。」である。

グループの人数が７～８人と大人数だったので，発表会では，JICA 研修員の皆さんとの交流会の感想や調べ学習をして分かったこと，自分が興味を持って取り組んでみたこと，グループ全体で取り組んだ調べ学習の発表など，役割を分担させて発表させた。これまで，児童一人ひとりが自分の役割を把握し，グループのリーダーを中心に話し合いや発表の練習をしていた。本時においては，欠席者のいたグループもあったがお互いで友だちの役割のところも読み上げるなど協力している様子が見られた。また，他のグループの発表を聞いての感想の中に，「C グループの発表で，バングラデシュの川の写真を初めて見たのでびっくりしました。」「みんなの発表が楽しかったので最後までしっかり聞いていた。」という感想があった。グループでまとめた作品をお互いに発表し合う活動を通して，他のグループが調べた内容についても理解を深めたり，多様な表現方法に気づいたりすることができたようである。

他のグループの発表を聞くときは，国語科の〈3・4 年生〉「話すこと・聞くこと」の言語活動「要点などをメモに取りながら聞くこと」を受けて取り入れることにした。聞きながら熱心にメモを取っていたが，新聞や具体物などをじっくり見る余裕がない児童も見受けられた。メモの取り方の指導やワークシートの作成の工夫が必要であった。

Ⅷ　研究の結果と考察

本研究ではテーマを「表現力を育てる学習指導の工夫～第 4 学年の国際理解の学習を通して～」と設定し基本仮説を「国際理解の学習において，学習形態や学習課題の持たせ方を工夫することにより，表現意欲が高まり，自分の思いや考えを伝えることができるようになるであろう。」とし，研究を進めてきた。さらに基本仮説を具現化した 2 つの具体仮説を立て，理論研究や実態調査を行い検証授業を実践してきた。そこで，2 つの具体仮説を検証することにより本研究の結果と考察とする。

1　具体仮説１の検証

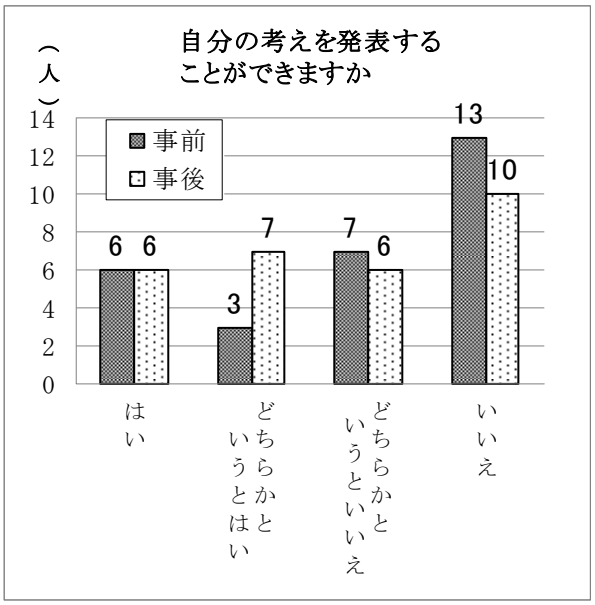
国際理解教育や表現力に関する理論研究や児童の実態調査を行い，分析することによって，実態に応じた指導のあり方が明確になるであろう。

生涯学習の基礎を培うためにも表現力の育成を図ることは極めて重要である。また，国際理解教育において「自己の確立」を実現するために自己表現力を育てることが求められている。

児童に表現力や外国に対する意識に関するアンケート調査を行ったところ，自分の考えを発表するこ

とに対して苦手意識をもっている。また，言語（英語）に不安をもっている児童が多いという実態が明らかになった。

そこで，まず最初に，受容的・支持的な教室づくりが必要であると考えた。「教室は間違うところだ」という表現がある。児童の自尊感情や自己肯定感を育てるために，特別活動の時間に構成的グループエンカウンターの手法を取り入れた授業を４回行った。また，グループ学習を積極的に取り入れ児童が自分の考えに自信をもって発言できるように場の設定の工夫を行った。



授業を進めた結果，「自分の考えを発表することができますか」という問いに対して「はい」「どちらかというとはい」と答えた児童が，指導前は，９人（31％）に対し，指導後は，13 人（45％）に増えている。最初「どちらかというといいえ」と答えていた女子２人も「どちらかというとはい」に変わってきた。「当たっているか心配だし，緊張して忘れるから。」と答えていたＹ女は，「ちょっとはずかしいけど，がんばってみたいです。」と，前向きな発言に変わってきた。また，「発表するときに，緊張して，間違えるから。」と答えていたＫ女は「自分の考えを発表して褒められるからです。」と自分の考えを認めてもらえるんだという安心感を味わうことができたようである。以上のことから，実態に応じた指導のあり方が明確になったといえる。

しかし，指導後も 10 人（55％）の児童が発表することが苦手と答えている。表現力の育成に向けて継続して指導していきたい。

２　具体仮説２の検証

グループでの学び合いや自分と身近な課題を調べることで表現意欲が高まり，自分の思いや考えを伝えることができるようになるであろう。

（１）交流会について

「研修員に話しかけることができましたか」について，「よくできた」「まあまあできた」と 26 人（90％）が答えており，ほとんどの児童が JICA 研修員との交流会で自分から外国の方に話しかけることができている。これは，事前学習として交流する国の言葉であいさつの練習をしたことの表れだと考えられる。グルーの友達とペアになってやったりグループ全員でやったり教師とやったりすることで自信を持つことができたようである。

また，交流会で JICA 研修員の皆さんと一緒にやる「遊び」を考える学習では，一人ひとりが自分の考えを出せるように，ワークシートにまず自分の考えを書かせて，その後グループで話し合わせた。一部の児童が話し合うのでなく全員が話し合いに参加する授業をめざした。「遊び」は児童にとって一番身近なものであり，どの児童でも発言できる学習課題である。普段なかなか自分の意見を言わない児童もワークシートに書かせて話し合いに参加させたことで，交流意欲が高まったと思われる。交流会後のアンケートで「外国の人とまた交流したいと思いますか」と尋ねたところ，クラス全員が「思う」と答えている。

JICA 研修員の皆さんとの交流会をした後の感想

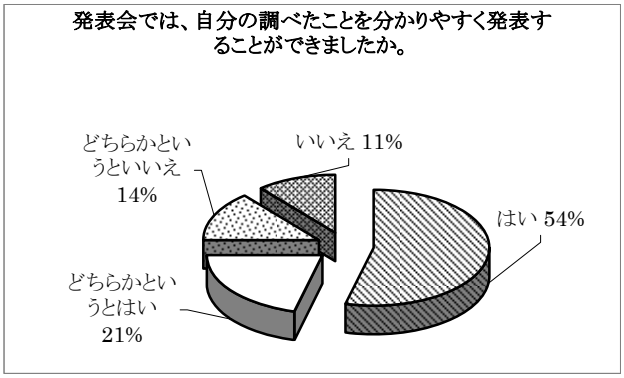
- 最初は，通訳してもらいましたが，「見といてよ。」って言って自分たちだけでやって，今度は一緒にやったりしました。
- 体で表したり，わかる英語は全部言った。
- ぼくが，花いちもんめを教えても通じなかったけど，友達が助けてくれました。
- 身ぶりで，ゲームのルールを教えました。
- きのうはあまりしゃべれなかったので，今度はいっぱいしゃべりたいです。
- 次に会う時は名前もはっきり伝えたいです。
- 今回は外国の写真を見せてもらったので，今度は沖縄の写真をみせたいです。

少数ではあるが，「自分ができなくて，友達に言ってもらった。」「リーダーが言ってくれた。」という感想があった。これは課題として指導の工夫を図っていきたい。

（2）発表会について

発表会への意欲づけとして，学習課題の選択が重要であると考えた。児童が発表したくなるような学習課題を持たせたいと考え，それぞれのグループで一つの文化に視点をあてて自国文化（郷土）と比較をする学習をさせた。自分たちの身近なものと比較することにより，互いのよさや違いに気づき，分かり合い，互いを尊重し合う心情育てることができるのではないかと考えた。そして，発表会で，外国の文化と自国文化（郷土）の相違点や類似点に視点をあて，伝えたい事柄を明確にして聞き手に伝えることで，表現力を育てることができるのではないかと考えた。

バングラデシュの民族衣装を調べていたグループは日本の着物との比較を行った。「沖縄の織物はどうだろう？調べてみるといいね。」と声かけをすると他の先生からの聞き取り調査やインターネットでの調べ学習から読谷山花織との関係を知ることになった。タイグループは，タイと沖縄のフルーツについて調べた。タイについて調べていた児童の中には，タイの食べ物に興味を持ち母親と一緒にタイのお菓子作りに何度も挑戦するものもいた。授業後のアンケートでは「本物のサリーを見せながら分かりやすく発表できた。」「自分が作った料理の写真を見せながら発表することができた。」と感想を述べている。



発表会後のアンケートで「発表会では，自分の調べたことを分かりやすく発表することができましたか」という問いに対して「はい」「どちらかというとはい」と 21 人（75%）が答えている。しかし，発表会で調べたことを発表できるようになったからといって，表現力が十分育ったとは言い切れない。今回児童に身についた力は，表現力の基礎につながる力と考える。今回育った力をさらに伸ばし，今後はビデオやパワーポイントなど子供たちそれぞれの思いが実現できるような多様な発表方法の工夫をしながら表現する力を育てていくことが重要であると考える。

Ⅸ　研究の成果と今後の課題

1　研究の成果

〇ペア学習やグループ学習等児童がお互いに学び合う場を設定したことで，自分の考えを発表することに慣れてきた。

〇ワークシートに自分の考えを書かせてその後グループで話し合わせたことで，自分の考えを述べることができた。

〇特別活動の時間に構成的グループエンカウンターの手法を取り入れ，「発表してみたい。」「発表してもいいかな。」と感じられる場面を作ったことで，自尊感情や自己肯定感などが高まりつつある。

○自国文化（郷土）との比較という視点を与えたことで，調べ学習や発表会での表現意欲が高まった。

2　今後の課題

・表現することが苦手な児童に対してその抵抗感をやわらげる指導の工夫

・各教科，領域と関連を図り表現力を育てていく学習指導の工夫。

・総合的な学習における多様な表現方法や手段を用いた表現活動への取り組み。

・児童の実態を的確にとらえ，授業仮説と具体的な手立てを設定する。

〈主な参考文献・引用文献〉

・文部科学省『小学校学習指導要領解説　総則編』平成 11 年 5 月　東京書籍

・金井慶子　1999『改訂小学校学習指導要領の展開　総合的学習編』　明治図書

・松本勝信　1997 『異年齢集団の意義とその生かし方』　大阪教育新潮

・八木義弘　1997 『小学校国際理解教育の進め方』　教育出版

・佐藤郡衛　1999『「総合的な学習」の展開』　ぎょうせい

・安彦忠彦　2003『総合的な学習ハンドブック』　ぎょうせい

・多田孝志　1997『学校における国際理解教育』　東洋館出版社

・佐藤郡衛　1999『国際理解教育の授業づくり』　教育出版

・林英和　1999『国際理解教育の授業づくり』　教育出版

・高尾正浩　2005『「総合的な学習の時間・体験活動」研修』　教育開発研究所

・沖縄市立美原小学校研究報告書　（平成 18 年度）